県内への侵入が懸念される新害虫ビワキジラミ

ビワキジラミは、2012年5月に徳島県で発生が確認された。国内では、初確認のビワの新害虫である。発生園地では、**激しい「すす病」により、栽培を放棄する農家も出るなど甚大な被害**が出ている。
その後分布を拡大しており、2016年に香川県、2017年には兵庫県（淡路島南部）で発生が確認され、本県への侵入が懸念されている。

果実に発生した黒い「すす病」の被害

ビワキジラミの成虫

新梢基部に付着した白い蝋（矢印の先）

果実の基部に付着した白い蝋（矢印の先）

主な症状（ビワキジラミ侵入警戒パンフレットより）

現在までに分かった生態
- ○大　き　さ：成虫は体長2.3～3.8mm
- ○形　　状：セミを小さくした形状
- ○発生時期：圃場では、4～6月に最も密度が高く、すす病被害も目立つ。8～9月の密度は低下するが9月下旬以降花芽を中心に産卵し、翌春まで増殖を行う。
- ○主な被害：すす病による果実の汚れ

本虫による被害が疑われる症状
- ○激しい「すす病」の発生
- ○すすの中に「白い蝋状物質」
- ※白い蝋状物質がアブラムシ等とのすす病と異なる。

防除は密度の高まり始める開花初期の11月中下旬頃と直接果実被害をもたらす世代に対する3月下旬(袋掛け前)に行う。登録薬剤にはｽﾀｰｸﾙ/ｱﾙﾊﾞﾘﾝ顆粒水溶剤やｽｶｳﾄﾌﾛｱﾌﾞﾙがある。